

女子短大生の調理教育における研究（第5報）

-調理手順と行動及び意識について-

○神田 あづさ ・松尾 奈美 太田 美穂 和辻 敏子

（目的） 近年、女子短大生における調理能力の低下やその原因については、種々報告がなされている。我々もすでに、調理能力評価の一方法として、ハンバーグの調理手順における理解度と食生活に関する態度および食意識との関連を報告してきた。今回は、入学当初と1年生終了時点での調理能力に影響を及ぼす要因について調査を行った。調理手順の理解度を調べるとともに、食事作りなどに表れる行動変化や意識の差について検討し、調理実習指導の一助とすることを目的として調査した。

（方法） 1）調査対象 平成6年度本学家政科入学生244名である。 2）調査期間 平成6年4月および平成7年1月に実施した。 3）調査方法 質問紙による自己記入方法を用いる記票留置法によった。

（結果） 1）家庭内の家事行動としては、家族および自分の食事作りが増加し、後かたづけは嫌いな家事であると答えた学生が5割に達するが、その必要性からもっとやらなくてはならないと答えた学生も5割いた。 2）調理操作項目の中では、切る、料理作り、盛り付け、味付けの順で得意になったと意識している。 3）調理に対する知識の量が多い学生が、必ずしも料理作りが好きとは限らない。しかし、料理作りが好きな学生は、一人で料理を作ることが出来ると答えた。 4）後期実習終了後の自己評価については、手順に関しては厳しく、それが重要ではあるが自分は出来ないということ認識できるようになった。しかし、総合評価では、手順よりも技術評価を重視し、結果として自己を高く評価する傾向が認められた。